

心

心	理	
論	卷	冊
三	一	六
賀	中	學
校		

五号

種	編	論
別	號	號
月	日	號
日		

130
245
Vol. 6止

西洋哲學講義

有賀長雄講述

卷六

西洋哲學講義目次

卷之六

第十七回

懷疑學派ノ由來

懷疑學派ノ論

第十八回

新プレート學派ノ由來

新プレート學派ノ論

第十九回

煩瑣學派ノ由來

西洋哲學講義 卷之六
煩瑣學派ノ論

第十七回

煩瑣學派ノ由來

...

第十八回

...

...

第十九回

...

西洋哲學講義 卷之六

彦根
立中
校印

西洋哲學講義卷之六

有賀長雄 講述

第十七回

煩瑣學派ノ由來

第一百七節 前ノ二回ニ於テハゼノ氏ノ哲學ト

エヒキユロス氏ノ哲學トヲ講述シタリ、二氏ハ

歷史上ヨリミレバ希臘哲學ノ最後ニ出デタル

モノト謂フベシ、本書第六節ニ見エタル如ク、希

臘哲學ハテオルス氏ヨリ始マリ、ソクヲチオス

氏ニ興リ、アリストトトル氏ニ至リテ極レリ、而

シテゼノ氏及ヒエビキユロス氏ノ時代ハ乃チ
希臘哲學ノ衰ヘタル時ナリ、故ニ次ニハ其衰ヘ
タリトスル所以ト、衰ヘタルヨリシテ何如ナル
結果ニ立チ至リシゾト云フ事トヲ述ベザレバ
前後ノ次第分明ナラザル可シ
諸テ此時哲學ノ衰ヘタル次第ヲ審ニセント欲
セバ、其比ノ希臘ノ時勢何如ナリシヤヲ知ラザ
ル可カラズ、史ヲ讀ム者ノ知ル如ク、希臘ノ隆盛
ニ當テハ、多クノ相獨立スル市府ヨリ成リ立チ
テ、山川風土歐洲ニ冠タリシヲ以テ、非常ノ文化

ニ達シ、恰モ少年ノ活發ナルガ如ク、銳氣充盈シ
自ラ溢レテ盛大ナル政體、宗旨、美術、道德等ヲ爲
スニ至リタリ、就中其美術ノ如キハ、理學工業未
曾有ニ進ミタル今日ト雖モ到底及ヒ難キモノ
多シトイフ、爾後内亂相續キ、加フルニ屢々波爾
斯ノ爲メニ苦シメラレテ、遂ニ歷山大ノ爲メニ
獨立ヲ奪ハレシニ及デハ、恰モ老人ノ厄難ニ會
ヒタルガ如ク、日ニ月ニ凋衰シタリ、是ニ於テ人
民ノ思想ノ上ニ何如ナル變動ヲ起セシゾト云
フニ、哲學ノ語ヲ以テ言フトキハ、客觀ノ境界ヲ

去テ主觀ノ境界ニ潛ムトトナリタリ、請フ之ヲ
説明セン、夫レ社會ノ隆盛ニ際シテハ、外界ニ健
全ナル政府アリ、宗旨アリ、道義アリ、美術アルガ
故ニ、人ノ心ハ常ニ此等ノ外物ニ引カレテ内界
ヲ反省スルノ遑ナク、殆ド自我アル事ヲ忘ル、
モノナリ、譬ヘバ太陽ノ赫々タルガ爲メニ衆星
光ヲ失フガ如ク、社會全體ノ精神熾々タルガ爲
メニ個々ノ人ノ精神ハ外ニ顯ハレザルモノナ
リ、然ルニ社會一旦亂レ、政府ハ斃レ、宗旨ハ壞レ、
道義ハ地ニ墮テ、美術ハ古人ノ糟粕ヲ嘗ルノミ

トナルトキハ、外界ニ心ヲ留ムベキ物無ク、只ダ
慷慨ノ外ハ爲ス事無キニ至レリ、然ルトキハ人
ノ思想自ラ内境ニ沈ミ、外物ノ據ルニ足ル者無
キノアマリ、内心ニ於テ思索ヲ練リテ、政府、宗旨、
道義、美術ノ基本ヲ爲スニ足ル者ヲ得ントスル
ニ至レリ、是レ思想ノ客觀ハ境界ヲ去テ主觀ハ
境界ニ潛ムトトナレル原因ナリ、アリスト
ル氏ヨリ前ノ哲學ト、其後ノ哲學トノ趣キヲ異
ニスル所以ノ者、此ニ在リ、ブレイト氏、アリスト
トトル氏等ニ在テハ、哲學ヲ以テ外界ニ在テ恰

モ政府、宗旨等ト同格ニ立テル一箇ノ健全ナル
學問タラシメントシタルモノ、如シ、然ルニセ
ノ氏、エピキユロス氏等ニ至テハ、哲學ヲ講究ス
ルノ目的此ニ一變シテ、哲學ヲ以テ夫ノ壞レタ
ル宗教、地ニ墮チタル道義ニ代リテ、人々生活行
爲ヲ理スル意見ノ府トナシタリ、乃チ國家隆盛
ノ秋ニ際シテハ外界ノ政府、宗旨、道義等ヲ以テ
人々ノ内心ヲ理セシニ反シテ、内心ノ意見ヲ以
テ外界ニ對スル所爲ヲ制スルトナリタルナ
リ、サレバコソ後ノ二氏ニ在テハ倫理ヲ以テ其

教系中ノ最モ重大ナル部分トセリ、加之論理、物
理ノ二科ニ至テモ皆同一ノ目的ヲ以テ之ヲ講
究セリ、乃チ論理ハ主觀(心意)ヲシテ種々疑惑ヲ
鎮定シテ確實智識ヲ得シムルノ路ナリトシ、物
理ハ主觀ヲシテ存在、鬼神、自然、人生、宇宙等ノ成
立ヲ理會シ、以テ恐ルベキ者ハ何々、望ムベキ者
ハ何々、自然ニ隨順シナガラ自分ノ幸福ヲ求ム
ルノ法ハ何々ト云フコトヲ悟知セシムル者ナリ
トセリ、

事ノ次第斯ノ如クナルハ、之ヲ哲學ノミノ上ヨ

リ謂へバ或ハ隆盛ノ兆ナリトセシ乎、何トナレ
バ今ヤ即チ哲學ヲシテ政治、宗旨、道義、ニ代テ人
ノ行爲ヲ制スルノ地位ヲ占メシメントスル者
ナレバナリ、然リト雖モ奈何セン其之ヲ討究ス
ルノ方法十分遠大ナラザルヲ云フ意ハ、此時ハ
哲學ヲ以テ特別ニ存立スル一科ノ學問ナリト
シテ討究セズ、但ダ心ヲ安スルタメ、理ヲ知ルノ
路ナリトノミシテ討究スルコトナルガユエニ、
勢ヒ主觀ニ偏シテ客觀ニ迂遠ナルニ至ル事止
ミ難シトナリ、アリストートル氏以前ノ哲學ニ在

テハ先ツ自分ノ心意ノ事ハ姑ク措キ、主トシテ
外界ノ事物ニ接シテ之ガ原因ヲ考究シ、心意ノ
如キモ外界事物ノ一ナリト看做シテ其理ヲ究
メタリ、ゼノ氏、エビキユロス氏ニ在テハ則チ然
ラズ、ゼノ氏ハ客觀ヲ措テ主觀ニ偏シタリ、何ヲ
以テ乎之ヲ知ル、曰ク氏ハ自然ノ秩序、即チ道理
ト云フ事ヲ根據トシ個々特殊ノ物及ヒ人ハ皆
此秩序ニ隨順スベシト説キタレ、氏、退テ考フレ
バ其所謂道理トハ矢張り自分ノ主觀ニ於テ立
テタル思想ナルニテ、之ヲ根據トスルハ思想ノ

西洋哲學叢書 卷之六
一統普遍ナル所ヲ取テ根據トスルニ異ナラザルナリ、其所謂自然トハ自然ニ關スル内心ノ思想ニ外ナラズ、同ジ自然トハ言ヒナガラモ、アリストートル氏ガ自然ニ就テ原因ニ體形、材料ノ二種アル事ヲ論究シ、今日ノ理學者ガ自然ニ就テ進化、分殊等ノ理法アル事ヲ講明スルト、ゼノ氏ガ人ハ自然ニ隨順シ天性ニ合スルヲ德トスト論ズルト、眼ノ附ケ處大ニ違ヘルナリ、又エビキユロス氏ニ至テハ、主觀ニ偏スルノ最モ顯著ナリトス、前回ニモ述ベタル如ク、氏ハ古來ノ哲

學中ノ三科ノ建テ方ヲ一變シテ物理、論理ヲ以テ倫理ニ從屬スル者ト爲セシニ非スヤ、是レ何ゾ客觀ヲシテ人々ノ自己ニ從屬セシムルニ外ナランヤ、氏ハ又快樂ヲ以テ無上ノ善トシタリ、是レ即チゼノ氏ガ人ノ思想ノ一統普遍ナル所(即チ道理)ヲ取テ根據トシタルニ對シテ、其特殊個々ナル所ヲ取テ根據トシタルモノナリ、彼レハ個々ノ私心ヲシテ一統ノ道理中ニ埋沒セシム可シトシ、是レハ一統ノ道理ヲシテ個々ノ私心ノ安易ヲ計ルノ機械タラシム可シト説キタ

ルモノナリ、其見ル所異ナリト雖モ、其占ムル所ノ地位ハ一ナリ、兩ナカラ主觀ノ境界ヲ出デザル者ナリ、一ハ私心ヲ斃ス可シト説キ、他ハ之ヲ立テヨト説クト雖モ、雙方トモニ私心ニ關シテ論スルニ於テハ一ナリ、初學ノ人ハ此邊ノ理義ヲ理會スルニ苦シム所アル可シト雖モ、之ヲ述ベザレバ當時ノ哲學ノ眞情ヲ描寫スルヲ難ケレバ、已ムヲ得ズ此ニ至ルモノナリ、
諸テ斯ク主觀ノ境界ノミニ潛ミテ思索スルトナリテ後ハ、哲學ハ何如ナル状態ニ立チ至リ

シゾト問フニ、答ヘテ曰ク、哲學ニ於テ哲學ヲ疑ハニ至リヌト、云フ意ハ、右ヲ見レバ私心ヲ捨テ、道理ニ合スルガ正經ノ所爲ナリト説クスト、
ア學派アリ、左ヲ見レバ之ニ反對シテ各人自己ノ快樂ヲ完フスルガ正經ノ所爲ナリト説クエビキユロス派アリテ、何レカ是ニシテ何レカ非ナルヤト考フルトキハ、據テ以テ是非眞偽ヲ判斷スルノ標準無クテハナラヌトヲ悟ル可シ、然レバ其標準ハ何ニ就テカ求ム可キト考フルトキハ、心意ニ就キテ求ムルノ外無キトヲ悟ルベ

シ、何トナレバ、何物ヲ以テ標準トスルヲ論セズ
之ヲ標準ト定ムルハ必ズ心意ノ所作ナレバナ
リ、心意ハ標準ノ標準ナレバナリ、然ルニ奈何セ
ン其心意ハ色々相異ナル者ヲ以テ標準トセリ、
現ニストア學派ノ徒ノ心意ニ於テ標準トスル
所ト、エピキユロス派ノ學派ノ心意ニ於テ標準
トスル所トハ差違セリ、若シ亦此兩派ノ標準孰
レモ非ナリトシテ、更ニ一新標準ヲ立テンニハ、
是レタゞ色々相支吾スル標準ニ一ヲ加フルニ
外ナラズ、到底結着ニ至ル一無キヤ明白ナリ、是

ニ於テ乎是非眞偽ノ標準ハ果シテ始メヨリ無
キニ非ズヤ、是非眞偽ヲ差別スルノ理由ハ浮虛
無實ナルニ非ズヤトノ疑惑起レリ、是レ希臘哲
學ノ末期ニ至リ所謂懷疑學派、即チ哲學ニ於テ
哲學ヲ疑フ學派ノ興リシ所以ナリ、其論ノ如キ
ハ左ニ詳説スル所アラントス、
懷疑學派ノ論

第百八節 エピキユロス氏ノ時ヨリ希臘滅亡

ノ時マデノ間ニ出デシ哲學者ヲ總稱シテ古代
ノ懷疑學派トイフ、然レモ其中自ラ三派ノ小區

別アリ、初ニ出デシヲ前懷疑論者(エルダー、スケ
プチックス)ト曰ヒ、次ニ出デシヲ中アカデミー派
ト云ヒ、後ニ出デシヲ後懷疑論者(レーター、スケ
プチックス)ト曰フ、

前懷疑學派ノ主唱ハエリスノハイロー氏ト云
フ人ナリ、氏ノ時代ハ紀元前三百六十年ト二百
七十年トノ間ニ在リ、歷山大ノ軍ヲ率キテ印度
ヲ征スルヤ、氏ハデモクリトス氏ノ徒弟ノ一人
タルアナクサトコス氏ト共ニ隊伍ニ從ヒタリ、
其意印度ノ哲學ヲ視察セントスルニ在リ、リユ

ウス氏曰ク、氏ノ印度ニ在ルヤ、親シク赤脚仙人
等(シムノツス、スツ)ト談話シタル事ナレバ、彼レ
ラガ氏ノ嘗テ見聞セシ所ト全ク異ナル教理ヲ
熱心信仰スルヲ視テ奇異ノ思ヲ爲セシニ相違
ナシ、而シテ斯クマテ總明ニシテ且ツ黽勉スル
人民ガ、異常ナル教法ヲ信仰シ、之ニ依テ作爲ス
ルヲ眼ノアタリ視ルニ附ケテハ、大ニ悟ル所ア
リテ、元來信仰トハ何如ナル者ゾト云フ、
心ニ問フニ至リシハ、
ラ、氏ハ兼テヨリテモクリ
トス氏ノ哲學ヲ伺フテ智識ノ本原ヲ討尋セシ

トスルノ志アルモノカテ、自ラ諸家ノ哲學ヲ疑
フノ情アリ、加フルニ今又斯ル事ヲ目撃スルニ
於テハ、其疑ヤ彌々增長シテ、終ニ十種ノ懷疑論
ト成リシモノナラント、實ニ左モアリツラン、
氏ノエリスニ歸ルヤ、此處ニ一家ノ哲學ヲ闡キ、
性甚ダ素朴ナルト、教旨ノ實際ニ親切ナルトニ
因リ、歲月ヲ出デスシテ大ニ名聲ヲ博シ得タリ、
然レモ氏ハ著述ヲ遺サザリシヲ以テ、今ヨリ其
論說ノ詳細ヲ伺フノ難シ、上代ニ於テスラモ既
ニ甚シク徒弟ノ論說ト混合シテ辨別シ難カリ

シト云フ、故ニ此ニハ徒弟ノ一人ナルフリユス
ノタイモン氏ト云フ人ノ傳フル所ヲ舉ゲント
ス、抑々此學派モストア學派及ビエビキユロス
派ノ如ク、主トシテ人生ノ實際ニ心ヲ留メテ、幸
福ヲ得ルノ路ヲ論ジタリ、而シテ幸福ヲ得シガ
タメニハ、先ヅ事物ノ理ヲ窮メ、之ニ依テ身ヲ處
スルヲ順路トスト雖モ、事物ノ理ナル者ハ到底
人ノ知り得ベキ所ニ非スト説キタリ、何トナレ
バ、人ハ只ダ事物ノ表相(アピヤレンセス)ヲ感覺
スルノミニ止マリテ、實相ヲ智覺スルヲ得ズ

且ツ其表相ハ時ト場合ニ依テ相違シテ、何レヲ
眞トモ偽トモ(即チ眞ニ實相ヲ表スル者トモ然
ラザル者トモ)定メ難ケレバナリト、是レ懷疑論
ノ眼目ナリ、夫レ人ハ五種ノ覺官ヲ有シテ同一
物ヨリ五種ノ相異ナル感覺ヲ受ク、即チ視、嗅、觸
味、聽コレナリ、此レ皆其物ノ表相ナリ、若シ人七
種ノ覺官ヲ有シタランニハ、必ズ其物モ七種ノ
表相ヲ現ゼシ、然ラバ即チ表相ハ果シテ彼レニ
在ルニヤ、將タ我レニ在ルニヤ、或ハ其中ノ孰ハ
彼レニ在ルニテ、孰ハ我レニ在ルニヤ、同一物ト

イヘ氏、時ト場合ニ依テ感覺スル所相異ナルヲ
以テ見レバ、表相ハ事物ノ自體ニ在ルニ非ズシ
テ、之ヲ感覺スル人ニ在ルモノ、如シ、何ニシテ
モ、事物ノ自體ノ眞狀ヲ表現スル者ニ非ザルハ
明白ナリトナリ、
傳ニ依レバ前懷疑學派ハ時ト場合ニ依テ事物
ノ表相相違スル次第ニ就キ十ヶ條ノ題目ヲ掲
ゲタリ、即チ左ノ如シ、(第一)動物ノ種類異ナルニ
從ヒ、體格モ異ナルユエ、同一事物ト雖モ感覺ス
ル所相同ジカラス、而シテ其何レノ感覺スル所

ヲ眞實ナリトモ定ムベキ由ナキ事(第二)人類ノ
間ニ於テモ、人々心身ノ性質異ナルニ從ヒ、同一
事物ト雖モ感覺スル所異ナル事(第三)同一人ニ
於テモ、覺官異ナルニ從ヒ、感覺スル所異ナリテ、
孰ノ覺官ノ報スル所ヲ眞實ナリトモ定ム難キ
ガ上ニ、五官ハ果シテ皆據ルニ足ル者ナルヤ否
ヤサヘモ未ダ判然タラザル事(第四)同一人ニ於
テモ、心身ノ容態異ナルニ從ヒ、同一事物ト雖モ
感覺スル所異ナル事(第五)同一事物ト雖モ、位置
場處、距離等異ナルニ從ヒ、表現スル所異ナル事

第六)各一物體ニ於テ全ク自餘ノ物體ト離レテ
存立スルヲ難ク、必ズイツモ空氣若シクハ其他
ノ物體ト聯合シテ存立スルユエ其物體ノミノ
本自ハ得テ智覺ス可カラザル事(第七)同一物體
ト雖モ、數量、溫度、彩色、動靜等ノ異ナルニ從ヒ、異
ナル印象ヲ呈スル事(第八)同一物ト雖モ之ヲ屢
々感覺スルト、稀ニ感覺スルトニ從ヒ異ナル感
觸ヲ起ス事(第九)一切ノ智識ハ皆相對ナル事、即
チ一ノ物體ト他ノ物體トノ關係ヲ表示スルノ
ミニテ、其物體ノ本自ノ狀態ヲ表示スル者ニ非

ザル事、第十同一事物ト雖モ、習慣、風俗、時勢、法律、
教法、輿論、教育、等ノ異ナルニ從ヒ、異ナル感觸ヲ
呈スル事コレナリ、同一物ト雖モ斯ク種々ノ次
第二依テ其呈スル所ノ表相相異ナル上ハ、果シ
テ孰ヲ以テ眞實ニ其物ノ本自ラ表示スル者ト
爲ス可キ、世ノ哲學者曰ク、道理以テ表相ノ眞僞
ヲ決スルニ足ル可シ、道理立テ、眞僞ノ標準ト
爲ス可シト、夫レ然リ、何ニ據テ乎此標準ノ果シ
テ、以テ眞僞ヲ辨別スルニ足ル者ナルコトヲ証明
セン、何ニ據テ乎道理ハ決シテ誤錯無ク、イツモ

正實ナルコトヲ証明セン、之ヲ証明センニハ、更ニ
眞僞ノ標準ヲ要ス可ク、其標準ノ標準トスルニ
足ルコトヲ証明センニハ、又更ニ標準ヲ要ス可クシテ、
底止スル所ヲ知ラザルナリ、即チ知ル感覺ノ上
ニ於テモ、感覺ニ淵源セル觀念ノ上ニ於テモ、觀
念ヲ以テ成レル智識ノ上ニ於テモ、眞實トイヒ
虛僞トイフ事ハ決シテ無キモノナル事ヲ、即チ
知ル人各々見解ヲ異ニシ、哲學者各々教旨ヲ異
ニシ、或ハ氷炭相容レザルガ如キアリト雖モ、其
實ハ何レモ是ナルニアラス、又非ナルニアラス、

非ナルニアラザルニモアラザル事ヲ是ヲ以テ
懷疑學派ノ徒ハ一言一句ヲ吐ク毎ニ、必ス語ヲ
添エテ曰ク「恐クハ云云ナラン」或ハ云云ナラン
予ヲ以テ見レバ云云「云云ナルニ似タリ」云云ナ
ル事モアラシ「予何事モ確知セズト雖モ云云」予
何事モ確知セズト云フ事モ確知セズト雖モ云
云ト、
之ニ由テ是ヲ觀レバ、懷疑學派ニ於テハ、物理學
モ論理學モ立ツベキ理由ナキ者ナリトシタル
ヤ明白ナリ、感覺果シテ據ルニ足ラズトセバ、何

ニ依テカ物理ヲ窮ムベキ、眞偽果シテ辨スルニ
及バズトセバ、何ノ爲メニカ論理ヲ講ズベキ、夫
レ然リ、然レバ即チ第三ノ一科タル論理ニ至テ
モ、立テ得ベキニ非ズ、且ツ立ツルニ足ラザルモ
ノナル歟、若レ然ラザレバ何ニ據テカ之ヲ建テ
以テ懷疑論者答ヘテ曰ク、倫理ハ物理論理ノ立ツ
能ハザル所以ニ據テ之ヲ立ツルヲ得ベク、且
ツ立テザル可カラズト、云フ意ハ他無シ、人ハ幸
福ヲ求メザル可カラズ、然レモ世ノ自稱哲學者
流ノ如ク眞理トカ道理トカ云フ根モ葉モ無キ

事ヲ討論シテ怨恨争諍ノ間ニ一生ヲ卒ハルハ、不幸ノ甚シキ者ナリ、如カズ、上述ノ次第ヲ考ヘテ、何事モ真ナルニ非ズ、偽ナルニ非ズ、善ナルニ非ズ、惡ナルニ非ズ、正ナルニ非ズ、邪ナルニ非ズ、願ハシキニ非ズ、願ハシカラザルニ非ズト悟ラシニハ、斯ク悟ルトキハ、富貴、健康、生活モ望ムニ足ラズ、貧苦、病苦、死苦モ恐ル、ニ足ラズ、精神無爲寂靜ナルヲ得ベシ、是レ恐ラクハ唯一ノ幸福ナラントナリ、是レパイロト氏及ヒ其徒弟ノ奉レタル倫理說ナリ、或ハ之ヲ稱シテ懷疑無情

論(スケプチカル、アバレトト曰ヒ、又斷定停止(サスベンス、ヲス、ジヤ、ゲ、オ、トト曰フ、是ニ至リテ哲學衰微ノ兆候顯然タリト云フベシ、
第百十節 次ニハ「中」カ「ゲ」ト「派」ノ懷疑論ヲ述ベシ、此時代ニハ「前」アカ「ゲ」ト「派」ト稱スル者モアリテ、論旨モ多少差別アリシ様ナレド、其差別後世ニ傳ハラス、當時ノ「アカ」ゲ「派」ノ哲學士中最モ有名ナル者ヲアルセシレユス氏及ヒカルニヤ、ディトス氏ナリトス、
アルセシレユス氏ハ紀元前三百十六年ヲ以テヒ

タニニ生マル、幼ニシテ算術、修辭ヲ學ビ、後シヲ
フレストス氏ノ門ニ入り、次テアリストトール
氏ニ咨請シ、轉ジテプロトト派ノホリモト氏ノ
徒弟ト爲ル、其ホリモト氏ノ門ニ遊ビシハ、恰モ
セノ氏ノ唱道ト同時ナリキ、蓋シニ氏ノ争諍ハ
此時ヨリ始マリシモノナラン、クレチヌ氏死ス
ルニ及テ衆學徒アルセシレユス氏ヲ推シテ「ア
カデミ」ニ坐主タラシム、氏此職ニ在テ黽勉ス、
功勞最モ少ナカラズ、舉止從容、氣質温和、人ノ過
失ヲ咎メズ、四方ノ愛慕スル所ト爲ル、氏一日朋

友ノ病床ヲ訪フ、會々其貧困ニ迫ルヲ見ル、辭ス
ルニ及デ竊ニ財囊ヲ病者ノ枕下ニ匿シテ去ル、
隸僕之ヲ發見スルニ及テ、病者莞爾トシテ言テ
曰ク是レ亦アルセシレユスノ親切ナル詐僞ノ
ミト、氏性稍々奢侈ヲ好ム、七十五歳ノ高齡ニ達
シテ強酒ヲ爲メ斃サル、

カルニヤテイース氏ハ「アカデミ」中最モ有名ノ
一人ナリ、紀元二百十三年ヲ以テ亞非利加ノレ
リニニ生ル、長ズルニ及テストア學派ノカイヲ
セニース氏ノ門ヲ叩テ敏辯ノ術ヲ受ク、氏ノ師

ト討論ヲ試ミルヤ、勢ヲ失フ毎ニ號テ曰ク余ノ
推論正實ナラバ師ハ誤テリ、若シ然ラザレバ必
イテセニトスヨ請フ余ガ授業ノ謝禮トシテ拂
ヒタル金ヲ返還セヨト、後カイヲセニトス氏ヲ
辭シテ當時アカデミトノ坐主タリシヘゲレナ
ス氏ノ門ニ入ルヘゲレナス氏カルニヤデ、トス
氏ニ授クルニアケデミト風ノ懷疑主義ヲ以テ
ス、師ノ死ニ及テカルニヤデ、トス氏代テアカデ
ミトヲ管帶ス、氏又好テクリシホス氏ノ著述ヲ
窮覽ス、卷秩浩漭ナレ、凡倦怠ノ色ナシ、クリシホ

ス氏ニストア學派ノ教理ヲ奉ジテカルニヤデ、
トス氏トハ反對ノ見解ヲ取リタリ、而モカルニ
ヤデ、トス氏常ニ言テ曰ク「若シ世ニクリシホス
無カリセバ、予争ツ今日ノ見識アラシヤト、蓋シ
氏ハタクリシホス氏ノ反對説ヲ讀ミタルガ爲メ
却テストア學派ノ過マテル所以自家ノ正實ナ
ル所以ヲ明白ニ悟知スルニ至リシヲ以テナリ、
反對説ノ非ヲ見テ却テ我カ説ノ是ナルヲ悟ル
ハ學者社會ニ往々アル事ナリ、又敏捷ニ且ツ細
密ニ論辯スルノ術ニ至テモ、氏ハタクリシホス氏

ヨリ習ヒ得タル所多シトイフ斯ク博識多能ノ
人タリレニヨリ希臘ト羅馬トノ間ニ紛議起リ
レトキ、アセンス府民ハ羅馬ヘ拂フベキ償金減
額ノ談判ノ爲メ、氏ヲ羅馬ヘ派遣シタリ、氏ノ當
時ニ重セラレシト見ルベシ、其羅馬ニ滞留スル
ニ當リ、名聲ヲ聞テ來聚スル者甚ク多ク、門前市
ヲ成ス、氏一日ゴルバ帝カトト檢察官以下ノ貴
顯ノ前ニ於テ公道ノ美ナル所以ヲ演説ス、辯舌
蕩々水ヲ流スガ如ク、議論高尚聽ク者驚嘆ス、平
生嚴重ヲ以テ名アル檢察官スラモ其辛クシキ

顔色ヲ少シク柔ゲタリト云フ、然ルニ翌日カル
ニヤデトス又講席ニ臨テ例ノ辯舌ヲ以テ人類
智識ノ信憑スルニ足ラザル事ヲ説明シ、前日公
道ノ美ナル所以ニ就キ演説シタル所ヲ悉ク破
毀シタリ、謹直一徹ノ検査官何カハ以テ耐ラベ
キ、即日ニ動議ヲ元老院ニ舉シ、羅馬ノ少年ヲ誘
惑スルノ恐アリトテ、希臘哲學士放逐ノ令ヲ發
セシメタリ、カルニヤデトス氏放逐セラレテア
センスニ歸リ、再ヒ激シクストア學派ト爭論ヲ
爲シ、又徒弟ヲ教授シテ、大ニ公衆ノ讚美ヲ得、九

十歳ノ高齢ニ達シテ没去シタリ、
第百十一節、抑々アカデミー派トイヘバプレ
ート氏ノ學派ノ別號ナル事ハ嚮ニ第五十一節
ニ於テ述ヘタル所ニ依テ明白ナルベシ、然レモ
何故ニプレート氏ノ學徒ノ中ヨリアルセシレ
ユス氏カルニヤデース氏等ノ如キ懷疑論者ヲ
出セシズ、又此等ノ論者ハ説ト先師プレート氏
ノ説トハ如何様ニ違フヤト云フ事ニ至リテハ、
一言セザレバ解シ難カラシ、
プレート氏ノ祖述者中ヨリ懷疑論者ヲ出カス

ニ至リシ原由ニアリ、其一ハ氏ノ哲學元來甚々
曖昧ナル所多キ事コレナリ、古人ノ中ニテモ既
ニ氏ヲ以テ懷疑論者ナリト爲ス者アリ、又全ク
之ニ反シテ獨斷論者ナリト爲ス者アリシホド
ノ事ナレバ、之ヲ解セントスル者ノ欲スル所ニ
從ヒ如何様ニモ解セラレタルモノナリ、乃チ懷
疑論ノ流行スル時代ニハ亦氏ノ論旨ヲ枉ケテ
懷疑論ト爲スヲモ容易ナリシナリ、其二ハプレ
ート氏自ラ觀念論ヲ建立センガ爲メニ懷疑的
ノ論辨ヲ以テ先輩ノ教系ヲ破却セシ事コレナ

リ、氏ノ前ニ出テタル哲學者ハ多ク五官ヲ以テ
真正ノ智識ヲ傳フルニ足ル者ナリトシタリ、然
ルニプレート氏ハ五官ノ傳フル所未ダ必ズシ
モ哲學ノ材料ト爲スニ足ル眞實智識ニ非ズ、只
カ意見ノ材料ト爲スニ足ルノミナリト説キタ
リ、事ハ「イチイタ」篇ニ詳ナリ、斯ク先輩ノ説
ヲ鎮定シテ後自家ノ觀念論ヲ其跡ニ建立セン
トシタルモノナリ、然リ而シテアルセシレユス
ハ此論辯ヲ繼襲シテセノ以下ノ諸氏ノ説ヲ駁
撃シ之ヲ以テ懸空ノ意見ナリトシタルモノナ

リ、サレド又アリスト、此ル氏ノ議論ナドヲ參
考スルトキハ、先師ノ觀念説モ未ダ必ズシモ取
ルニ足ラザル者ナリ、昭々タルユエニ、己ムヲ
得ザル勢ニ因リテ懷疑論ヲ採ルニ至リシモノ
ナリ、イハレバ又ハ一書ヲ後ニ味ミ、大ニトモ事用
嚮ニ第十五回ニ於テセノ氏ノ論理學ニテハ深
信又ハ確信ト云フ事ヲ以テ眞理ノ標準トシタ
ル事ヲ述ベタ、以即チ人ニ迫テ認承セザルヲ
得ザラシムル類ノ智覺ハ皆眞實ナリトノ論ナ
リ、然ルニアルセシレユス氏ハ之ヲ攻撃シ、虚空

ナル智覺ト雖モ確信ヲ促スモノ多シト言ヒテ
ストア學派ノ標準ヲ破毀シタリ、人ノ意見ノ中
ニモ果シテ真理ニ合ヘル者無シトハ言ヒ難ケ
レ、此之ヲ真理ナリト認定スル所以ノ者ハ到底
有ルベカラズト説キタリ、其語曰ク「人ハ一物
ヲ知ラズ又一物ヲダモ知ラズトイフ事ヲ
モ知ラズト、然レモ倫理ノ一事ニ關シテハアル
セシレユス氏所謂蓋然法（プロバビリチ）ト云
フ者ヲ提唱シタリ、即チ眞ニ善タリ惡タル者ハ
確知シ難ケレ、凡人ハ道理上ヨリ蓋シ善ナラン

ト思フ事ヲ避クベシ、然ルモ自ラ天理ニ背カ
ザルニ幾カラントノ論ナリ、而シテカルニヤテ
ース氏ニ至リ此論ヲ大成シテ物理、論理ノ諸科
ニ於テモ蓋然思想ヲ得ルノ法ヲ詳論シタリ、
第百十二節 後懷疑學派ハ前懷疑學派ト大同
小異ナリ、即チ希臘凋衰ノ最モ甚シキ時ニ際シ
テ前懷疑學派ノ論旨ヲ再興シタルモノナリ、此
一派ニ於テ最モ有名ナル人ヲアニシテ、モス氏
アグリッパ氏、及ヒセキスタス、エムピリコス氏ナ
リトス、アニシテ、モス氏ハ懷疑論ヲ基據トシテ

西洋哲學講義 卷之六
ヘラクリトス氏ノ教理ヲ恢弘セシトナシ、アグリッパ氏ハ頻リニ何事モ証明セズニ置クベシト云フ論ヲ唱ヘタリ、其故ハ証明ハ又証明ヲ要シ其又証明ハ又々証明ヲ要シテ底止スル所ヲ知ラザレバナリ、セキストス、エムピリコス氏ハ推測式悉ク皆取ルニ足ラザル循環推論(リイゾニング、インサルクル)ナリト説キタリ、何トナレバ既ニ斷言ノ正實ナルヲ假定スルニ非ザレバ大前提ヲ以テ正實ナリト謂フベカラザル道理ナレバナリ、譬ヘバ茲ニ「一切人類ハ動物也」(大前

提)井上ハ人間也(小前提)故ニ井上ハ動物也(斷言)ト云フ推測式アリトセンニ、井上モ果シテ人間ナル上ハ、其動物タル事ヲ既ニ假定スルニ非ザレバ始メヨリ「一切人間ハ動物也」ト言ヒ難キ道理ナレバナリ、

セキスタス、エムピリコス氏ノ書ニ見エタル原因論ハ、甚々面白ク、且ツ緊要ナル者ナレバ、此序ニ述ベン、但シ此ハ氏ノ創説セシ所ニ非ズ、其前ヨリ此一派ニ於テ言ヒハヤセシモノナリ、其論ニ曰ク、世人動モスレバ原因結果ト言ヘリ、是レ

果シテ何爲者ソト考フルニ、全ク無實ノ總念ナ
リ、其故ハ、原因結果ト云フハ、原因タル物ヨリ結
果タル物ヘ對スル關係ナレド、其關係ハ何レノ
物ニ在ルニモ非ズシテ、人ノ思想ノ上ノミニ在
ルモノナレバナリ、加之原因ト結果トハ同時ニ
發スルカ、又ハ相繼テ發スルカノ二ヲ出デズ、然
リト雖モ、何レニシテモ理ニ合ハザルナリ、即チ
若シ同時ニ發スルモノナリトスルトキハ、何レ
カ原因ナルヤ結果ナルヤ辨別シ難ク、何レヲ原
因ナリト云フモ咎メ難キ次第トナルベシ、サリ

ト云、又原因先ニ發シテ後結果之ニ繼テ發スル
モノナリトスルトモ、其原因ハ原因タルベカ
テズ、何トナレバ結果ナルニ非ザレバ原因ハ原
因タルガレバナリ、又結果先ニ發シテ後原因發
スト言フガ如キニ至テハ、無經テ語タルヲ辨明
ヲ竣タズトナク、其難キヲ以テ、其ニ至リ、其
スル第十八回、其書ニ於テ、其難出テ、又、其ニ至リ、其
スル、新アレトト學派、其由來學士、其難問、其

第百十三節、其リ、エ、ウ、ス、氏、懷疑學派、以後、希臘
哲學ノ景況ヲ述ベテ、曰ク、哲學ハ既ニ希臘ニ於

テ之ヲ欽崇スル者無クナリタルノ末、足リ本土
ニ止ムルヲ得ズナリテ、外國ニ出テ、敬信者
ヲ求ムルヲトハナリ又、苟モ哲學上ノ疑問ト爲
スベキ者ハ悉ク皆之ヲ提出シタレバ、一トシテ
解釋シ得ヘキ者無キガ如ク見ユルニ至リ、苟モ
人ノ機巧ヲ以テ結構シ得ヘキ教系ハ悉ク皆之
ヲ結構シタレバ、一トシテ堅固拔ク可クテザル
者無キト顯然タルニ至リ又、斯ク新規ニ起ス可
キ疑問モ、舊來ノ疑問ヲ答釋ス可キ術モ、其ニ盡
キ果テシカバ、哲學士ハ五尺ノ身體ヲ置ク處無

キニ苦ミ、此ニ一策ヲ案ジ出シタリ、即チ外國ヲ
遊歷シテ傳教スルト是レナリ、外國ノ人民ハ未
タ希臘ノ哲學ヲ伺ヒ得ザリシユ、陳腐説ヲ喰
ハサレテモ鮮肉ノ如ク思ヒテ喜ビ味ヒタルノ
ミナラズ、當時印版ノ術未タ有ラズ、書冊ノ價値
頗ル貴カリシユ、口授ヲ以テ教育スルト多カ
リシヲ以テ、哲學士ヲ招聘厚待スル者甚カ多カ
リキト、

此時哲學士ノ多ク杖ヲ引キタル所ハ羅馬ト歴
山太利亞トナリ、兩處トモニ哲學ノ生國ニハ非

ガリシヲ以テ、地味適セズ、始終十分ノ發達ヲ見
ガリシト雖モ、就中歷山太利亞ニ在テハ一時熾
盛ヲ極メ、亦多少ノ機抽ト勢カトヲ表ハシタリ、
先ツ羅馬ニ在テノ景況ヲ述ベン、抑々希臘ニ次
テ文化隆盛ヲ極メタル國ハ羅馬ナリ、而シテ西
洋ノ古昔ヲ談ズル者ハ皆希臘羅馬ト一口ニ言
フガユエ羅馬ニ於テモ亦希臘ニ於テノ如ク哲
學盛大ニ至リシナラント臆想スル者モアラン
カナレド、是レ事實ニ非ラズ、盛大ハ盛大ナリシ
カド、真ニ其深奥ニ至ラズシテ止ミタリ、シユウ

グレル氏曰羅馬哲學ハ希臘哲學ノ注解也ト此
語當レルニ似タリ、是レ恐クハ既ニ希臘哲學ノ
明備セル者目前ニ存セシニ因リ、只タ之ヲ傳習
スルノミニ汲々トシテ自ラ思想ヲ練ルニ遑
無カリシガユエナラン、竊ニ惟ルニ我日本ニ於
テ昔ヨリ真理講窮ノ甚カ昌ナラザリシモ、或ハ
同様ノ事情ニ原因スル所多カラシ乎我國ニ於
テハ文事未ダ十分開ケザルノ前ヨリ既ニ支那
學ヲ輸入シテ、上王侯ヨリ下万民ノ子弟ニ至ル
マデ之ガ傳習ヲ勉メシメタルユエ、畢竟學問ト

云へバ唐土ノ學問ヨリ外ニ無シトノ觀念ヲ銘
心セシムルトナリ又羅馬ニ於テモ然リ、文事
稍々開ケレヤ否ヤ希臘學盛ニ行ハレ、希臘語ヲ
話シ、希臘文ヲ綴ルヲ以テ學者ノ本望トスルニ
至リ希臘ノ奴隸ニ命ジテ兒童ヲ教育セシメ、希
臘ノ博士ヲ聘シテ哲學修辭ヲ少年ニ授ケシメ、
足アセンスノ地ヲ踏サル者ハ學者ニ非ズト爲
ストトナリ又其勢恰モ本朝廷曆以後ノ漢學ニ
於ケルガ如キモノアリキ、則有名ナル辨舌家シ
セロノ如キ詩人ホレーースノ如キ、皆アセンスニ

遊學シテ朝ニアカデミストヲ訪ヒテハフレート
氏ヲ懷ヒ、夕ニ花園ヲ過ギテハエヒキユロス氏
ヲ慕ヒ、又或ル時ハ玄關ニ息テセノ氏ヲ憶ヒ夕
リ、就中ストア學派ノ嚴括主義トエヒキユロス
派ノ快樂主義トハ羅馬ニ於テモ多クノ信徒ヲ
得タリ、然リト雖モ、概シテ言フトキハ諸派ノ教
理ヲ取テ之ヲ折衷シタル者多キニ居レリ、所謂
折衷說(エクレクチシユム)コレナリ、是レ亦外國
ノ哲學ヲ傳習シタルヨリ起レル自然ノ結果タ
ルノミ、サレド茲ニ羅馬ノ哲學ニ關シテ甚ダ輕

西海地志卷第六
卷之六
○
ジ難キ一事アルハ他ナシ、新ニ哲學ノ機軸ヲ開
クコソ無カリツレ、政治、文學、論說等ノ如キ人
世日用ノ實務ノ上ニ哲學上ノ原理ヲ應用セシ
ハ羅馬ヲ以テ嚆矢トスル事コレナリ、此時ヨリ
ナン哲學ハ歐洲文化ノ一大元素トナリニケル、
第百十四節 次ニハ亞歷山太利亞ノ哲學ノ景
況ヲ述ベン此歷山太利亞ト云フハ埃及ノ主府
ニシテ、紀元前三百三十二年ニ歷山大ノ命ニ依
テ建テタルモノナリ、其後トリミー統ノ王代々
此處ニ住居シ、之ヲ以テ地球上最モ豊饒ナル帝

國ノ都トナシタルガ上ニ、歐洲ト東洋トノ通商
ヲ此ニ總攝スルニ因リ、歲月ヲ出デスレテ當時
ノ開明世界中ノ最モ富豊ニシテ華美ナル市府
トナリタリ、希臘猶太及ビ其他ノ國民ノ此處ニ
來集スル者多ク、一時人口七十五萬ヲ下ラザリ
シトイフ、又トリミー統ノ創設ニ係ル有名ナル
學士堂及ビ文庫アリタリ、學士堂ハ文學ニ從事
スル徒ヲ住ハシメ國財ヲ以テ扶持スル處ナリ、
文庫ニハ九萬種ノ書範ヲ備ヘタリ、其卷數四十
萬餘ト云フ、紀元前六十年ニ至リ埃及ハ羅馬ノ

併吞スル所ト爲リテ後モ、縣廳ヲ歷山太利亞ニ
置キタルガエ工依然トシテ文事上甚々重要ナ
ル地位ニ立チ又、希臘哲學ノ衰フルニ當テ哲學
士ノ杖ヲ此ニ引ク者拔擧ニ遑アラズ、舊來ノ教
系ヲ悉ク輸入セシハ言フニ及バズ、多少ノ機軸
ヲ此ニ関ク者モアリテ、加フルニ基督教及ヒ猶
太教ノ敵抗スルニ逢ヒシカバ、忽チ茲ニ哲學上
ノ一活劇ヲ演ズルニ至リタリ、此活劇ノ總體ヲ
稱シテアレキサンドリヤニスム又ハアレキサ
ンドリヤ學派ト曰フ、是レ然シナガラブレート

學派ストア學派ナド云フ場合ニ於テハ如ク一
々限定ナル教系ヲ指スモノニ非ズ、其實ハ種々
相異ナル教理アリシニテ、畢竟一般ノ趨向ニ於
テ彼レ是レ相合同シタルノミノトナリ、其趨向
トハ何ソ、曰ク他ナシ、一方ニ於テハ希臘哲學ノ
斯クマデ盛大ヲ極メタルモ終ニ學派トシテ斃
レザルハ無久果テハ忌ムベキ懷疑論ニ陥リ、又
一方ニ於テハ羅馬等ニ於テ諸派ノ折衷ヲ試ミ
タレド是レトテモ確乎タル成功ヲ見ザリシニ
依リ、今日マデ依賴セシ道理ヲ離レテ、信仰ヲ工

スニ依テ哲學ヲ再興セントセシテ是レナリ、羅馬ニ於テハイザ知ラズ、歷山大利亞ニ於テハ殊サラ此ル形勢ニ至リ易キ事情アリタルハ他無シ、此地ハ猶太印度等ノ如キ教法ノ盛ナル國々ニ近ク、且ツ猶太人ノ此ニ移住セシ者モ多カリシヲ以テ、人ノ思想自ラ東洋ノ隱微風ヲリエンタル、ミスチシスムニ染ミタルトコレナリ、然ルニ信仰ニ依テ哲學ヲ立テントセシニ當テモ、成ル可ク前代ノ大家ノ教旨ニ於テ基據ヲ取ル所アリシ者ハ、他人ニ優ル勢ヲ得ベカリシヤ

明白ナリ、即チ前回ニ述べタル所ヲ以テモ見ルベキ如ク、プレートト氏ノ哲學ハ感覺及ビ感覺ニ基ク智識ノ信憑スルニ足ラザルヲ論ジ、諸家ノ教系ノ中一トシテ採ルニ足ル者無レト斷言シテ、更ニ觀念ヲ以テ哲學ノ基址ト爲シタルユズ、大ニ當時哲學ヲシテ道理ニ依寄セシムルヲ止メント計リシ者ノ心操ニ適應スル所アリタリ、加之プレートト氏ノ著述中ニハ極メテ曖昧隱微ナル者モアリタリシカバ、之ヲ色々ニ附會シテ自家ノ新說ノ証佐トナスニ甚々便利ナリ

キ、例へばハル等ニ云ハル篇ノ如キハ斯一及ビ有在ノ概念ニ關スル蒙蔽ナル論辯ヲ載セタルエ工、一派ノ學徒ハ夫ニ之ヲ珍重シ、目シテプレート氏神學ノ最モ珍重スベキ記録ナリトシタリ、大ニ其神學ノ最モ珍重スベキ記録ナリトシタリ、斯ク基據ヲプレート氏ニ取リ以テ哲學ト教法トヲ結合セントシタル學徒ヲ稱シテ新プレート學派ト曰フ、其最モ有名ナル者ヲファイロー氏、プロタイナス氏、ホルフリト氏ナリトス、紙數將ニ盡キントスルヲ以テ此處ニハ主トシテプロ

タイナス氏ノ教系ニ據テ此學派ノ論者ヲ畧述スベシ、

新プレート學派ノ論

第百十五節 新プレート學派ノ論ヲ述ベシニハ最初ニ其所謂消魂(エクスタレイ)ナル者ヲ説明セザル可カラズ、是レ佛家ノ三昧又ハ定ト云フニ能ク似タル事ナリ、是レヨリ先キストア學派及ビエピキユロス學派ノ衰フルヤ、懷疑論興テ各種ノ理論ヲ破却スルノ地位ニ立チタリ、而シテパイロー以下ノ諸氏ハ無善、無惡、無真、無偽、

西洋哲學叢書 卷之六
ト悟テ精神ヲ無爲寂靜ノ地ニ安息セシメント
謀リタリ、然ルニ彼等ハ却テ大ニ其望ヲ失シタ
リ、其故何トナレバ斯ク反面ノ地位ヲ守ランガ
爲メニハ或ハ徳ハ善ナリト云ヒ、苦痛ハ不善ナ
リトイヒ、道理ハ正實ナリトイフガ如キ種々雜
多ノ正面ノ理論ニ絶エズ抗敵セザルヲ得ザリ
シヲ以テ、却テ無爲寂靜ニ安息スルヲ得ザリ
シガエエナリ、是ニ於テプロタイナス以下ノ諸
氏ハ說テ曰ク、人ニ客觀的ノ智識ニ依ラズ議論
辨証ニ依ラズ、玄妙不測ナル心魂ノ發動ニ依テ

直接ニ天理ノ眞觀(ウジヨン)ヲ得ルヲアリト、是
レ所謂消魂ナリ、プロタイナス氏曰ク、眞理ハ証
明ニ依テ知り得可キモノニ非ズ、其他何ニ依テ
ズ知ル者ト知ラル、者トヲ別ニシテ其間ニ立
ツ中介ヲ經テ知り得可キモノニ非ズ、知者(即チ
自我)ト被知者(即チ眞理)トノ差別ヲ消滅シタル
上ニテ始テ之ニ達スルヲ得可キモノナリ、人
自我ヲ以テ道理ヲ觀觀セントスルモ豈得可ク
ンヤ、只タ道理ニ於テ其自體ヲ眞觀スルノ一ア
ルノミナリト、且ツ斯ク道理ニ於テ道理ヲ眞觀

スルニ當テモ其道理ノ内ニ於テ主觀客觀ノ區別尚ホ未タ消滅セザルトキハ、冥觀尚ホ未タ完全ナラス、眞理智覺ノ最モ高尚ナル者ハ物我ノ區別ヲ超絶スル單純唯一ノ眞理ヲ冥觀スルニ在リ、斯ク靈魂其己ヲ忘レテ直チニ斯絶對(セ、ア)ブツリト即チ大極ニ冥合シ、大極ノ神火ヲ以テ己ヲ照ラスヲ大悦(ラ、プ、チュ、ア)ト云フ、既ニ斯ク神ト冥合スル者ハ前ニ珍重セシ己カ靈魂モ今ハ之ヲ輕蔑スルトトナレリ、何トナレバ靈魂アリトスルハ尚ホ知者ト被知者トノ差別アリト

スルニ異ナラザレバナリト、斯ク斯一ト合體シ、恰モ失神シ眩冥シテ絶對ニ沈没スルヲ事トスルハ是レ新アレント學派ノ特質ニシテ、其真正ノ希臘哲學ト異ナル所ナリ、以上述ブル所ニ依テ觀レバプロタイナス氏ハ道理及ビ道理ノ智覺スル所ノ者ノ上ニ立ツ平等無分別ナル者アリト論スルモノナルヲ知ル可シ、此完全原理ヲ以テ道理ノ上ニ立ツ者トスル理由ハ他無シ、既ニ道理アレバ亦之ニ對スル事物即チ万有無カル可カラズ、道理アリ、万有

アルハ、既ニ單一ノ境界ヲ出テ、數多ノ境界ニ
入ルナリ、サレド、單一ハ必ス數多ニ先キ立ツモ
ノナラザルヲ得ズ、先ヅ一有テ而シテ後多有ル
モノナルヲ得ザレバナリ、既ニ多アレバ、一アル
ヲ思議スルヲ易シ、然レモ未カ一アラザレバ多
アルヲ思議スルヲ難シ、知ル可シ斯一ハ道理ト
万有トノ先ニ出ヅルモノナルヲ、此原本ノ一
物ヲプロタイナス氏ハ色々ニ呼ビ或ハ之ヲ斯
初(セ、フアルスト)ト曰ヒ、斯一(セ、ウオン)ト曰ヒ、斯善(セ、
グトド)ト曰ヒ、有在ノ上ニ在ル者ト曰ヘリ、而シ

テ此等ノ名稱ハ只々比論的ニ此物ヲ指示スル
ノミ、其實情ヲ表示スル者ニ非ズト言ヘリ、何ト
ナレバ、其實狀ハ言語ノ能ク名狀スル所ニ非ザ
レバナリ、此物ヤ思想アリモ、意志アリモ、存在ア
リモ、効カアリモ言ヒ難シ、何トナレバ、若シ此等
ノ資質有リトイヘバ、既ニ此等ノ資質無キ者ト
對立スベク、從テ多ト成リテ其一タル所以ヲ失
スレバナリ、此物ハ後ニスピノザ氏ガ思想ト廣
袤トノ上ニ立ツ本體(ソブスタンス)ト唱ヘ、一
ゲル氏が有在ト無有トノ上ニ立ツ絶對ト唱ヘ

タル者ト符合スルナリ、
次ニハ斯一ト他ノ二物、即チ道理ト世界トノ關
係ヲ述ベシニ、プロタイナス氏ノ論ニ依レバ、道
理ハ元ト斯一ヨリ分出セシモノナリ、即チ神先
少道理ヲ生ジ、道理次ニ世界万物ヲ生ジタルナ
リ、氏曰ク火ハ熱ヲ生ジ、雪ハ寒ヲ生ジ、香料ハ香
ヲ生ズ、又有機物ハ各々其自體ニ似タル有機物
ヲ生産セリ、之ト同シ次第ニテ、圓滿充足ノ斯一
モ、其圓滿充足ナルニアマリ、其自體ニ似タル不滅
ノ有在、即チ道理ヲ生産スルナリ、道理ハ斯一ニ

次テ最モ善美ナル者ナリ、而シテ斯ク道理ヲ生
産シテ後モ斯一ハソレガ爲メ其身體ヲ損滅ス
ルト絶エテ無キナリト、偕テ此道理ナル者ハ是
レ世界万物ノ理想(アイヂヤ)ナリ、各種物體ノ儀
型タル觀念ナリ、一切ノ物類ハ此儀型ニ從テ製
作セラレタル者ナリ、個々ノ物類ハ消滅アリト
雖モ道理ノミハ常恒不變ナリ、凡ソ六合ノ間ニ
存在スル物類種々無量ナリトイヘ、凡必ズ皆一
定ノ旨趣、經紀、調和アラザル無シ、其旨趣其經紀
其調和ノ由テ來ル所ハ道理コレナリ、此事ヲ思

料セバ畧ホ道理ノ尊大ナル所以ヲ領解スル
ヲ得ベシトナリ
次ニ世界万物ノ由來ニ關シテハ、フロタイナス
氏曰ク、斯一ヨリ道理ヲ生産スルト同シ次第ニ
テ道理ヨリ世界万物ヲ生産スルナリト、然レド
斯ク世界ヲ生産シテ後モ道理ハソレガ爲メ自
體ヲ損減スルト絶エテ無キナリト、世界万物ハ
道理ノ一定ノ體ヲ具ヘテ、一定ノ時一定ノ處ニ
現ハル、者ナリ、其全體ヲ稱シテ万有靈(ウチー
ルド、ソウル)ト云フ、

然ルニ斯ク道理中ヨリ出テタル物類ノ中ニ甚
々奇妙ナル者一アリ、人間コレナリ、其奇妙ナル
所以ノ者ハ他無シ、一體ニ於テ道理ト物類トヲ
兼具スレバナリ、人間ノ心意ハ道理ノ境界ニ屬
シテ、觀念ヲ包含シ、永遠不死ナル者ナレド、其身
體ハ外物ノ境界ニ屬シテ、物類ト共ニ生死アル
者ナリ、是ヲ以テ人ハ恰モ或ル時ハ水ニ住ミ、又
或ル時ハ陸ニ住ム蛙ノ如キ物ナリ、新ブレトト
學派ノ論旨ニ曰ク、人ハ斯ク兩様ノ元素ヲ備フ
ル者ナレバ、其主トシテ務ムベキ所ハ成ルベク

靈魂ヲシテ肉體ノ牢獄ヲ脱シテ道理ノ境界ニ
入り、尚ホ進テ原本ノ斯一、即チ神ト冥合センコ
ヲ務ムルニ在リ、凡ソ人タル者ノ願フベク欲ス
ベキ者ニシテ、斯ク消魂ノ有様ニ臻ルノ上ニ出
ヅル者ハアラシト、フロタイナス氏ハ曾テ自分
ニ身體アルヲ見テ赤面シタリトイフ、蓋シ余輩
ヲ以テ之ヲ觀レバ斯ク兩様ノ元素ヲ備ヘタル
カラニハ、之ヲ僥倖トシテ、心意ヲ以テ外界事物
ノ真理ヲ考察シ、以テ道理ト万物トノ中裁ヲ計
ルコソ、人ノ本分タルベキニ、強テ嚴括以テ肉體

ヲ制シテ、一方ノ元素ノミト冥合スベシト言フ
ハ、少シク其當ヲ失スルニ似タリ、ヘーゲル氏ノ
人性ニ關スル見解ノ如キモ、右ト同様ナリト雖
モ、氏ハフロタイナス氏ノ如ク可感覺界ヲ脫離
センコヲ勸メズ、却テ之ニ由テ道理ヲ研究セン
コヲ勸ムルニ似タリ、
第百十六節 フロタイナス氏ハ紀元二百零五
年ニ埃及ノリコボリスニ生レ、當時歷山太利亞
ニ於テプレート氏ノ哲學ヲ教授セシアンモニ
ユス、サッカス氏ニ就テ修業シタリ、既ニ自家ノ機

軸ヲ開クノ後歳四十二シテ羅馬ニ遊ビ、專ラ教授ニ從事ス、氏ノ論文無慮數百篇ナルベシト雖モ要スルニ、皆倉卒ノ際ニ成レルモノニシテ聯絡モ順序モナシ、死スルニ及テ高弟ホルフヤリト氏ニ命ジテ遺稿ヲ蒐集セシム、則分類シテ六秩ノ書ト爲ス(九卷ヲ以テ一秩トス)此ホルフヤリト氏ト云フハ高名ナル學者ナリ、紀元二百三十三年ニ生マレ、羅馬ニ於テ哲學ヲ教授シ、辯說ヲ以テ當時ニ稱セラレタリ、降テ第四世紀ニ至リテハ歷山太利亞羅馬ノ兩處ヨリ「新ブレートト教」ヲ

アセンスニ輸入シ、學問所「アカデミー」ニ於テ之ヲ教授シタリ、于時ホルフヤリト氏ノ門人アイアマブリコス氏最モ同派ノ尊崇ヲ受ク、第五世紀ニ於テハプロクララス氏(四百十二年出生、四百八十五年死去)泰斗ノ名譽ヲ得タリ、此時ニ至リ新ブレート學派ノ品格大ニ壞レ、其尊キ者ハ神通ヲ得、靈驗ヲ現シ、未來ヲ談ズルヲ事トシ、其卑キ者ハ魔法ヲ使ヒ、幻術ヲ行フヲ事トシタリト云フ、會々基督教ノ大ニ勢力ヲ得ルニ逢テ、他教ハ悉ク皆斃サレ、新ブレート教ノ如キモ第六世紀

ノ比ニ至リテ終ニ全ク斷滅ニ歸シヌ、是レナン
希臘哲學ノ成リノ果トハ知ラレケル、哀ハカナ
キ最後ト謂フベシ、
第十九回 煩瑣學派ノ由來

第百十七節 煩瑣哲學(スコラスチスム)ト云
フハ第九世紀ヨリ第十五世紀ニ至ルマデノ哲
學ノ總名ナリ、スコラスチスムナル語ヲ直譯
スレバ學館教ノ義ナリ、又之ニ屬スル者ヲ「スク
ールメン」ト云フハ學館人ノ義ナリ、シヤレメー

帝ノ馬上ニ歐洲ヲ一統スルヤ、兵力ノ創業ニ
利アルモ、守成ニ便ナラザルヲ悟リ、大ニ基督教
ヲ興シテ、諸邦ニ寺院ヲ建立シ、又寺内ニ學館ヲ
設立シテ、教法ノ深理ヲ討究セシメタリ、其學館
ニ於テ修辭、文法、辨証式等ヲ教授セシ者ヲ學館
博士ト曰ス、學館哲學ノ稱此ニ始マル、今譯シテ
煩瑣哲學ト云フモノハ、其字義ヲ取ラズシテ其
形情ヲ取ルナリ、
リユウキス氏曰ク、審ニ考察スルキハ即チ知ル煩
瑣哲學トハ一條ノ教系ヲ指スモノニ非ズシテ

只如哲學史上ノ一變動ヲ謂フモノナルヲ、此變動ハレヤレメーン帝ノ學校ト共ニ興リ、其衰へタル時共ニ衰へタリ、當時多ク口授ヲ以テ教育セシニ因リ、辯論ノ術盛ニ興リシモ自然ノ勢ト謂フベシ、蓋シ書冊印版ノ術未ダ有ラザリシニ當リテハ、口授以テ教育スルノ外無カリシト勿論ナリ、一旦印刷術ノ發明アリテ以來ハ、辯論者ノ戰場大ニ擴リ、又之ニ與ル者ノ數モ増セシノミナラス、其武器ノ如キモ遙ニ口授ニ優ル者(即チ文章)ヲ用フルトトナリタルヲ以テ、學校(即

チ口授所)ノ緊要ナル所以次第ニ減少シ、哲學ハ寺院ヲ出デ、俗間ニ往來スルトトナリ、又、サレド其以前ニ在テハ、博士ノ講席ノ外ハ其教理ヲ聽聞ス可キ處無カリシヲ以テ、有名ノ學者輩出スル毎ニ波濤ヲ冒シ或ハアルフスノ峻嶮ヲ踰エテ學徒來集シテ、僅ニ其唇ヨリ落ル金言玉詞ヲ拾ヒ取りタリ、巴里府ノ如キハ數年ノ間煩瑣哲學ノ上ニ於テ古昔ノアセンス府ニ比敵スル地位ニ立チタリ、又哲學生ノ學位ノ如キモ同府ニ於テ之ヲ授與セシカバ天下ノ民ヲシテ巴里

ニ遊學シテ大家ノ講筵ニ臨マザル者ヲ目シテ
無學ト做サシムルニ至リ又、是ヲ以テ貌利顛
遠陬ヨリ、加羅貌利亞ノ深山ヨリ、西牙ヨリ、日耳
曼ヨリ、伊多利ヨリ、保蘭ヨリ、學就ラズンバ死ス
トモ還ラジト心ニ誓テ來集スル少年引キモ切
ラザリキ、當時旅行ノ危難ハ決シテ今日ノ比ニ
非ズ、車駕旅館ノ便利トテハ有ラズ只ダ大志ニ
促サレテ獨歩路ニ登リ、或ハ士卒ノ護衛ヲ受ケ
或ハ寺院ニ投ジテ一夜ノ雨露ヲ凌ギ、或ハ民家
ニ入り學生ヲ唱ヘテ慈悲ヲ請フヲ最上ノ便宜

トシタリ蓋シ當時ノ民俗一般ニ學生ヲ重セシ
ヲ以テ斯ル請ニ應セザル者稀ナリシト云フト、
第百十六節 右ニ述ベタル事情ニ就テモ畧ボ
察知セラルベキガ如ク、煩瑣哲學ノ大體ハ基督
教即チ信仰ト道理即チ思想トヲ媾和セントス
ルニ出テタル者ナリ、故ニ純粹ノ哲學ニ非ズ、又
純粹ノ宗旨ニ非ザルナリ、今日ノ日本ニ於テハ
宗旨ノ勢力大ニ衰ヘ、何事モ思想ヲ以テ辨ズル
ユエ、信仰ト云フ者ニイカ計リ勢力アリヤ知ル
者少シト雖モ、信仰ニ於テ却テ道理ノ上ニ立チ

テ人ヲ制スルニ至ルコト古來其例少ナシトセズ、
希臘哲學ノ懷疑ニ陷ルヤ、世人皆道理ノ恃ミ難
キヲ思ヒ、道理ヲ範ラズシテ人生ノ目的ヲ知り、
來生ノ有無ヲ察スルノ路ヲ得ンコトヲ願ヒタリ、
會々基督教ノ猶太ニ興テ人ノ信仰ヲ警醒シ、蔓
衍シテ羅馬帝國ニ入ルニアヒテ、賢不肖トナク
翕然トシテ之ニ投ズル恰モ春草ノ風ニ靡クガ
如クナリキ、是ニ於テ乎世ハ信仰ノ世トナリ、政
治ニ交際シ、法律ニ於テ一卷ノ「バイブル」以テ不
可拔不容疑ノ規律ト爲スニ至リ、六百年ノ久シ

キ、一人トシテ思想以テ聖教ノ信偽ヲ議スル者
アラザリキ、然ルニレヤレメーン帝ノ學館ヲ寺
院ニ設ケ、辯論以テ宗旨ヲ口授セシメシニ當テ
ヤ、此ニ意外ノ一結果ヲ生ジタリ、即チ人ヲシテ
思想ニ據テ宗旨ノ恃ム可キ所以ヲ理會セント
スルニ至ラシメタル事コレナリ、夫レ信仰ノ要
ハ學バズ修メズシテ自ラ之ヲ容ル、ニアリ、博
士ノ講義ヲ族テ學修シテ之ヲ容ル、ハ理會ナ
リ、信仰ニ非ザルナリ、宜ナル哉リユウキス氏ノ語
ノ如ク、煩瑣學派ノ學校ト共ニ興リシヤ、然レ凡

初メ數百年ノ間ハ思想ニ於テ信仰ノ上ニ立タ
シトセズ、却テ信仰ノ下ニ立チテ之ニ勢ヲ増ス
ベシトシタリ、是レ煩瑣哲學ノ主意ナリ、レユウ
クレル氏曰ク、煩瑣哲學トハ確定シテ世ノ信取
スル所ト爲リタル神學上ノ教理ノ隷僕トナレ
ル哲學ヲ謂フナリ、仮令隷僕トマデハ下ラズト
モ到底神學ニ從屬シ、哲學神學ノ雙方ニ涉レル
疑問アル毎ニ、斷然一步ヲ讓リ、神學ヲ推シテ以
テ標準ナリ真理ノ討檢ナリトシタル者ナリ、尚
ホ密ニ言ヘバ煩瑣哲學ハ教會ノ權下ニ於テ古

代哲學ヲ再興シ之ト宗旨ト抵觸スル所ヲ每
ニ必ズ哲學ヲ下ダシテ宗旨ニ從ハシメタル者
ナリト、然リ而シテ後ニ至リニ學ノ權衡顛倒シ、
道理ニ於テ勢力ヲ挽回シテ信仰ノ上ニ立ツニ
至リレハ、是レ抑々近世哲學ノ起ル所ナリ、此處
ニハ煩瑣學派ノ論ヲ畧述シテ一旦此篇ヲ閉シ
ントス、

煩瑣學派ノ論

第百十七節 煩瑣學派中最モ上世ニ出テタル
學者ニシテ舉ゲテ論ズルニ足ル者ハ

タス氏ナリトス、又エリシナ氏ト稱ス、蘇克蘭ノ
人ナレド愛蘭土ニ於テ養育ヲ受ケ、學就ルニ及
テ王チヤレス、セボルトノ聘請ニ應ジテ佛蘭西
ニ移住シタリ、氏ハ真誠ノ哲學ヲ以テ真誠ノ教
法ト同一ナリト爲シタリ、而シテ自ラ稱シテ基
督教ノ當初ノ教旨ヲ再興スルモノト爲シタリ
凡實ハ新プレートト學派ノ哲學ヲ採用シテ一家
ノ神學論ヲ立テタルナリ、其論ニ曰ク、神ハ無上
ノ原一ナリ、一ニシテ而モ多ナル者ナリ、其一ナ
ルヨリ轉展シテ多トナルハ神ニ數箇ハ善徳ア

ル所以ナリト、又進化ノ次第ヲ説テ曰ク、神先ツ
最モ普遍ナル者ヲ生産シ、次ニ是レニ比スレバ
稍々普遍ナラザル者ヲ生産シ、順ヲ追テ下テ終
ニ最モ普遍ナラザル者、即チ個々物體ニ至ルナ
リト、例ヘバ最初ニ廣袤ヲ生ジ、次ニ具體廣袤即
チ定體ヲ生ジ、次ニ有機定體及ビ無機定體ヲ生
ジ、有機定體中ヨリ動物植物ヲ生ジ、動物中ヨリ
脊骨動物及ビ無脊骨動物ヲ生ジ、脊骨動物中ヨ
リ哺乳動物及ビ不哺乳動物ヲ生ジ、哺乳動物中
ヨリ人類猿類、犬類、牛類、馬類等ヲ生ジ、人類中ヨ

リ黄人、白人、黒人、等ヲ生ジ、黄人中ヨリ日本人、支那人、朝鮮人、等ヲ生ジ、日本人中ヨリ佐藤、安井、齋藤、鹽谷、井上等ノ個々人物ヲ生ズルガ如キヲ云フナリ、其他天地万物ミナ斯ク神ノ轉展シテ普遍ヨリ特殊ニ至ルノ間ニ生ズル者ナリトノ論ナリ、後ニ至リ此論ヲ約シテ「有普遍而後有個物」(ユニバルサリヤ、アンテ、レム)ト曰フ、此ジヨン、スコタス氏ノ論ハ論理學ノ上ヨリ言フトキハ、所謂實體論ナル者ニ當レリ、實體、名目、概念ノ三論ノ事ハ嚮ニプレートト氏ノ哲學ヲ講ス

ルキ第六十四節ニ於テモ之ニ論及シタリト雖モ、其殊ニ激シク行ハレシハ煩瑣學派ノ時ニ在レバ、今又之ヲ再說セザル可カラズ、抑々ジヨン、スコタス氏ノ論ニ依レバ、世ニ實在アル者ハ獨リ個々物體ノミニ非ズシテ、廣表、定體、有機物、無機物、動物、人類、松類、蜂類等ノ如ク一類若シクハ一種ニ屬スル衆個體ヲ包括スル普遍モ亦實在アルナリ、然ルニ名目論者ハ之ヲ駁シテ曰ク、人類ト云ヒ、松類ト云フガ如キハ別ニ實在アル者ニ非ズ、只カ詞アルノミニ、個々ノ人ニ普通ノ性質ア

ル所ヲ指シテハ假リニ人類ト云フ名目ヲ下シ、
個々ノ松ニ普通ノ性質アル所ヲ指シテハ假リ
ニ松類ト云フ名目ヲ下スモノナリト、其故ハ譬
ヘバ井上ハ人類ナリト云フ命題アリトセンカ
若シ井上モ人類モ共ニ實物ナリトスルトキハ、
恰モ甲實物ハ乙實物ナリ井上ハ安井ナリ石ハ
此水ナリト云フニ異ナラズ、正經ニ非ザルト勿
論ナレバナリト、乃チ此論ニ依ルトキハ個々物
體ノ外ニ實在アル者アラザルナリ、始メテ名目
論ヲ唱ヘテ實體論ニ敵對セシハ第十一世紀ノ

後半期に出ズタルロスセリトス氏ト云フ人ナ
ル者何故ニ此議論斯ク激シクナリシゾト問
スニ答ニテ曰ク、其神ノ三位一體ト云フ事ニ大
ナル關係アルニ因ルモノナリト、三位トハ天父
神子、聖靈ト曰ス、神一體ニシテ、此三位アリ、此三
位ニシテ固一體ナリト説クナリ、諸テ若シ名目
論者ハ言テ所信ナルニテ個々物體ノ外ニ實在
アル者無シトセバ、天父モ一個ノ實物タリ、神子
モ一個ノ實物タリ、聖靈モ一個ノ實物タラザル
ヲ得ズ、即チ三位一體ニハ非ズシテ、三位三體ナ

ラザルヲ得ズ、若シ又實體論者ノ言フ所信ナル
ニテ、個物モ普遍モ共ニ實在アル者ナリトセバ、
一體ノ神位ヲ三様ニ區別ス可キ理由無シト謂
ハザルヲ得ズ、又概念論者ノ論ニ曰ク、普遍ハ名
目ノシニ因テ、實在ナキ者ニ非ズ、又個物同様ニ
實在アル者ニモ非ズ、二者ノ中間ニ立ツ者ナリ、
即チ心中ニ在ル概念ヲ指ス者ナリ、個物ヲ智覺
スルハ五官ナリ、然レ凡人ハ五官ノ外ニ又理會
カキ有シテ、人類、松類等ニ屬スル衆個物ノ間ニ
存スル關係ヲ心識セリ、是レ概念ナリト、蓋シ此

處ニ於テ、紙數無ケレバ三論ノ種類竝ニ事歴
ヲ詳論スルヲ得ズ、尚ホ其故細ヲ見ント欲スル
人ハ須ク余ガ頃日譯解印行スル近世哲學第八
章ヲ參校スベシ、

シヨク、石コタス氏ニ次デ有名ナリシハアンセル
公氏ナリ、氏ハ紀元千零三十三年ヒドモントノ
ア夫スタニ生マレ、千零六十年ノルマンチーノ
ヘクノ僧寺ニ入り、三年ニシテ僧長トナリ、十五
年ニシテ寺長トナル、千零九十三年ヨリ千百零
九年ニ至ルマデ法王クレゴリー第七世ヲ奉

テ英國カシテルブリトニ大管長タリ、
キ以テ後世ニ稱セラレ、即チ「クリド、ユツト、インテ
リガム」即云フ是レナリ、委シク言ヘバ先ヅ基督
宗ノ專斷教下クマヲ以テ千古動カザル真理ノ
定説ナリト定メテキ、之ヲ以テ智識ノ基本トス
ルガ善レトナリ、之ニ反レテ、人々一己ノ區々々
ル經驗、微々タル研究ニ依テ知り得タル所ヲ基
據トシ、之ニ依テ信不信トヲ決スルハ惡ロシ、智
識ニシテ果シテ宗旨ニ合ヘバ正經ナリ、若シ合
ハザレバ、既ニ其合ハザルハ故ヲ以テ無經ナリ

トナリ、アンセルム氏又有名ナル議論ニ系アリ、
左ノ如シ、
其神在論ニ曰ク、神ノ存在スル所以ハ、人ガ神ト
イフ者ニ就テ有スル觀念ヲ以テ推シテモ知ル
コトヲ得ベシ、神ヲ信ズル者モ信ゼザル者モ皆以
爲ク、神トハ無上最大物ノ義ナリト、然レモ只ダ
人ノ觀念ノ中ノミニ存在スルト、觀念ニモ存在
シ又現實ニモ存在スルト、孰カ最モ大ナルニ幾
キトイヘバ、觀念ニモ現實ニモ存在スルコソ最
モ大ナルニ幾キコト勿論ナリ、即チ知ル神ハ現實

ニ存在スル者ナル事ヲト、今アインセルム氏ノ語
ヲ以テ之ヲ述ベシニ曰ク、其レヨリモ尚ホ大ナ
ル者存在スル事ヲ思議シ難キ者、即チ無上最大
物ハ單ニ智力ノ中ニノミ存在スル能ハザル事
明白ナリ、何トナレバ、若シ智力ノ内ニノミ存在
ストアルトキハ、智力ト現實トノ兩方ニ存在ス
ル者ヲ思議スルコトヲ得ベクテ、是レゾ最モ大
ナル者ナルベケレバナリ、是ヲ以テ、其レヨリモ
尚ホ大ナル者存在スル事ヲ思議シ難キ者、若シ
果シテ單ニ智力ノ内ニノミ存在ストスルトキ

ハ、此レ既ニ其レヨリモ尚ホ大ナル者存在スル
事ヲ思議シ得ベキ者ナラザルヲ得ズ、是レ素ヨ
リ有ルマジキ事ナリト、
又其贖罪論ニ曰ク、アタムハ神ノ禁戒ヲ犯レタ
リ、神ハ無限ニ大ナル有在ナリ、故ニ神ニ對スル
罪ハ無限ニ大ナル罪ナリ、無限ニ大ナル罪ハ無
限ニ嚴ナル刑罰ヲ要セリ、若シ人類ニシテ無限
ニ嚴ナル刑罰ヲ被リタラシニハ、各男各女無間
地獄ニ陥ル可シ、然レモ各男各女ヲ無間地獄ニ
下スハ神ノ善徳ニ背ケル事ナリ、サリトテ又嚴

刑無しニ免スハ、神ノ公道ニ背ケル事ナリ、是ヲ以テ善徳ニモ公道ニモ背カザラント欲セバ、取ル可キ策一ナラデハ無シ、即チ無限ニ大ナル有在ヲシテ人類ニ代テ嚴刑ヲ被ラシムルコトナリ、無限ニ大ナル有在トテハ神ノ外ニ無シ、然レ氏神ニシテ人類ニ代テ嚴刑ヲ受ケンニハ、先原犯者アタムノ血統ヲ受ケタル人間ノ形體ヲ備ヘテ人間ノ世界ニ生レザル可カラズ、是レ即チ神子(基督)ニ於テ人體ヲ具ヘテ此世ニ降誕シ信徒ノ爲メニ神罰ヲ代贖シテ神ノ公道ヲ完フ

シ給フ所以ノ者ナリトノ論ナリ、此論ハ教會ノ採テ以テ誠締ト爲ス所トナリタリ、右二条ノ議論ハ以テ煩瑣學派ノ辯論ノ性質ヲ見ルニ足ル者ナリ、蓋シ推論ノ體裁ハ極メテ精緻ナルニ相違ナキモ、却テ形式ニ拘泥スル過大ニシテ、事理ニ實着ナラザルニ似タリ、第十一世紀中ニ在リテハアリストトール氏ノ哲學未ダ多ク歐洲ノ西部ニ傳ハラズ、論者常ニプレート氏及ビ新プレート學派ノ哲學ニ依據シタリシヲ以テ、推論モ未ダ十分ノ精緻ヲ致サザリシガ

第十二世紀ニ至リ亞拉非亞人ノ手ヲ經テアリ
ストートルノ著述ヲ西牙佛蘭西等ニ傳ヘテヨ
リ、煩瑣哲學ノ體面一變シ、推論ノ體裁一層精緻
ヲ極メタリ、其時アルバータス、マクナス、トーマ
ス、エクアイナス、ダン、スコタス等ノ學者出デ、
頻リニアリストートル氏ノ諸書ヲ注解シ、之ニ
基督教ノ主義ヲ挿入シテ、最モ綿密ナル哲學書
ト爲シタリ、此等哲學教法ノ結合ハ始メテ完全
ノ度ニ達シタリトイフ、然レモ凡ソ泰西ノ教法
上ノ事ハ本邦人ニ解シ難キモ多ケレバ、餘ハ他

日ニ讓リテ姑ク筆ヲ擱クト云フ爾、

西洋哲學講義卷之六大尾

明治十六年四月二十七日版權免許
明治十八年一月出版

製本服部

大坂府平民

有賀長雄

講述人

東京麴町區三番町

六十七番地

東京府平民

阪上 半七

出版人

東京日本橋區
十軒店六番地



弘通書肆

大坂

梅原龜七

同

岡島真七

西京

村上勘兵衛

同

大黒屋太郎右衛門

名護屋

片野東四郎

東京

北畠茂兵衛

同

稻田佐兵衛

同

丸家善七

同出

吉川半七

同二十一日文盛堂清造



